

Eureka IX

六年制通信 No.22 令和3年10月29日(金)号

白熱教室、その後

マイケル・サンデル著『ハーバード白熱教室講義録(上)(下)』を紹介したのは2年前でした。その時、私はこう書きました。「この本は今から10年ほど前にNHKで放映された「ハーバード白熱教室」を文字に起こしたものです。君は電車の運転手でブレーキが利かない。目の前には五人の作業員がいる。このままでは確実に五人を殺してしまう。その時、脇にそれる待避線があることに気づく。ハンドルは利く。しかし待避線の先には一人の作業員がいる。待避線に入れば確実に一人を殺してしまう。君はどうか。ハンドルを切らずに五人を殺す方をとるか、ハンドルを切って（この場合自分の意志で）一人を轢いて五人を助ける方を選ぶか、さあ、ハンドルを切るといふ人は手を挙げて。この問いかけから講義が始まります。題して「正義」について。ハーバードの学生たちの多くは五人を救って一人を殺すことは正義だと考えます。サンデル教授は、これが正しい、と解答のようなものは一切示しません。そのかわり五人を救うために一人を殺すという別の場面を提示します。そうすると学生たちに微妙な変化が生じます。その変化を、哲学者の言葉を借りて説明していく、そういった講義形式です」 思い出しましたか？ 今日はこの話を少し続けましょう。

この、五人を助けるか一人を助けるかの二者択一は「トロッコ問題」と言って、もう50年以上前に提起された問題です。テーマは「ある人を助けるために他の人を犠牲にしているのか」です。これ、難しいですね。実際にはパニックになって冷静な判断はできなさそうですけど、思考実験としては非常に優れた設問だと思います。それにこれには様々なバリエーションが設定でき、そのたびに自分の判断が変わっていくような気がします。もし一人と百人ならどうでしょう。一人の命と引き換えに百万人が助かるならどうしますか。百万人を救うと考える人が多そうですね。功利主義的には少数の犠牲で多数を助けることは理にかなっているのですが、つまり数で決めるべきなのでしょうが、多数の方が全員私のようなじいさんで少数の方が幼稚園の子たちなら、君どうします？ しつこいですが、もう一度一人対五人で考えてみましょうか。一人が妊婦さんで、五人が犯罪者ならどうしますか。私はもちろん妊婦さんを救います。一人がどんな人で五人がどういう集団かをいろいろ想定してみると、自分の中に犠牲にする命の、あるいは救おうとする命の順番ができているのを感じます。「命はどれも大切だ」とか言いながら、順位をつけているのですね。私は老人よりも子供を救おうとするでしょうし、男よりも女を助けようとするでしょう。数は関係なくね。もちろん私と違った判断をする人もたくさんいるはずですよ。

さて、どうしてもう一度「トロッコ問題」を取り上げたか。いつでしたか自動運転の車の試験走行があったでしょ。あのニュースを見ていて思い出したのです。自動運転というのはAIの判断で走行する車ですが、そのAIにプログラムを施すのは人間ですよ。では、もし小さい子どもが飛び出してきたとして、ハンドルを切ったら子どもにケガはないが乗っている人は崖から転落するか川へ落ちるかして死ぬような場合、どのようにプログラミングがされているのでしょうか。飛び出してきた人間を救うことを優先するようにプログラムされているとしたら、乗っている人間に関しては安心できないわけですから、そんな車に乗りますかね。ひょっとして飛び出してきた人によって何種類も判断を変えるようプログラムしているのでしょうか。そう、「トロッコ問題」は思考実験ではなく、近未来には結論を出さなければならない重要な問題になったのではないかと、そう思ったわけです。

そうしたら、さすがMITです。私が懸念していることなんてとっくに取上げて世界中にアンケートを取っていたのです。四千万人近くが回答しているということです。ネットは嫌いですが、今回は利用しました。「モラルマシン」と検索しました。それによると地域と文化によって回答に差があるとのこと。面白いですね。日本は最も功利主義から遠い国らしい。私は先ほど「数に関係なく」子どもを助けると言いましたが、数に関係なく、というのが日本人らしいわけです。あと、信号無視をしている歩行者は死んでも仕方がないと、日本とフィンランドは考えるそうですが、ほんとかねえ。こんな場合はこういう判断をしますと知っておかないと、あるいは知ったがゆえに乗れないことがあるかもしれませんね。これって、結構大きな問題だと思いませんか。

今週のおすすめ

・片桐はいり 『わたしのマトカ』 (幻冬舎文庫)

マトカはフィンランド語で旅。フィンランドへ向かう飛行機の中で、世界一まずいといわれるお菓子を口に入れるところから物語は始まります。片桐さんはインパクトのある個性的な顔立ちの女優さんですから、お顔は知っていましたが、170 cmを越える身長だということも、こんなに文章の上手な方だということも知りませんでした。なぜフィンランドなのか。映画のロケだったのです。『かもめ食堂』という映画で、日本人女性がヘルシンキで食堂を経営し、そこを舞台に繰り広げられる日常を描いたものですが、片桐さんは食堂を手伝うことになる日本人旅行者ミドリ役で出演されています。一か月にわたるロケ中に経験したあれこれをユーモラスに綴っています。現地の人々が生き生きと描写されていて、エッセイとして素晴らしい仕上がりに思いました。この本を読むまでは、フィンランドは日本と並んで「安全」と言われている国。サウナの国。ムーミンの国。とはいっても現地の人より日本人の方がムーミンに詳しいらしい。ポテトが大好きな国。これくらいしか知らなかったなあ。

実は先に『かもめ食堂』(群像 幻冬舎文庫)を読み、映画も観ていたのですが、私には、原作や映画よりも片桐さんのエッセイの方が断然面白かった。

私は出不精なので外国を見て歩こうなどと思ったことはないのですが、こういう本があるといいですね。書齋にしながら自分も行った気になれますから。

BGMは Mariah Carey の *Without You* でした…。